

延岡だより

— 古文書と取り組んで —

玉 木 恒 雄

(会員・延岡市古城町)

しばらく暖かい日が続いていましたが、ローマ法王と一緒に寒波も到来、桜までには後何度か雪を見ないといけないのでしょうか。それでも山歩きしていると梅・山つづじ、そしてあせびも日だまりのは咲き始めて、にぎやかになりました。

佐伯史談百二十五号読ませてもらいました。事務局の雑務を後進に譲られたご様子、人材豊富の貴会、機会が与えられれば後進達もそれなりにやりこなしていくと思います。御自愛の上ゆっくりと成長をみてやって下さい。

巻末の「かんす」の話、面白く読みました。当地でもやはり「かんす」と言います。デカンシヨ節「酒は飲め飲め茶がまでわかせ」も「かんすでわかせ」とやると豊日風でしょうか。鹿兒島(今の都城)での「焼酎」は飲め飲めうがに(大がま)でわかせも「かんす」を使うと今流行のお湯割りや豊日風になるのでしょうか。

御手洗先生の「明治の佐伯三青年」も興味深く読みました。

佐藤信淵の『日向経緯』に延岡の半紙を評して「紙は岩国に及ばず……紙肥に及ばず。これ土の事天の施策を行わざるの……」とあったのと併せて考えました。豊日山中(農村)の楮、みつまた生産状況を知りたいものですね。しかし地方の資料本当に

少ないですね。

今私達の古文書部会で読んでいる延岡市三須町の庄屋日誌(天保十三年)(この中にも楮の上納の記録がありました)に写しのある天保儉約令、「もやし」や「促成野菜」の禁止、延岡の町方でそんな需要がある程経済性が発達していたのだろうかと話し合ったのですが……。そんな事を末端(地方)にまで関係のない瑣事まで、一言一句違わないよう写させる事大主義、やはり徳川体制倒れるべくして倒れたのですね。

二十七頁の佐伯人士の策のなさをなげく文も、当地と相似た何かがあるのででしょうか。明治維新と西南戦争の時の延岡藩の対処も、時勢に暗い行動でした。西郷と一戦を交えて敗れた臼杵藩も、長崎あたりでいわゆる「正直者の賢慮なし」の動きのようです。百姓のなりをして山に逃げた竹田士族は大したものです。

日向では高鍋の秋月藩士が、竹田と似た賢い動きをしています。一部の者が西郷軍に参加していますが、殿様を始め不参加を説いています。

田舎にいて情報不足のなかで、儒教風タテマエ論をやっていると、あなるのでしょうか。自分がその場にいないと「千万人と言えども我行かん」と自説を押し通せる程の行動ができるかは疑問ですが、いつもいろいろな事を考えながら、あるいは考えさせられながら、貴会誌を読ませてもらっています。

最後にお願ひがあるのですが……五十五年十一月刊角川の『日本地名大辞典』大分県版で「染矢家文書」(大分県資料二十六)というのがあることを知りました。これについてできればコピーを取りたいのですが、さしあたり、

① 佐伯図書館にあるのか（大分市まで行かねばならないのか）
② 大体どのくらいの量があるのか（コピー料の問題）
③ 資料として整理済みか（活字化、製本化等）それとも原本

のままなのか（コピーに必要な資料）

などについて知りたいのですが、お知らせ願えればと考えました。いつか「必要な時は助力を……」とあったお言葉に甘えて御面倒をお願いします。

染矢家 延岡ではお医者さん始め大貫（南方恒富地区）恒富本村出北の庄屋筋で、岡富東海地区の吉本、山口両家と共に、延岡地方の地方百姓の実質的な支配者で、いづれも（染矢・山口・吉本）豊後系と言います。延岡移住の時期は室町時代を言っている人が多いようです。

そんなことで、豊日文化圏の地方を知るには、そのうちの染矢家を知る必要がある（宮崎県内では、今のところ、地方資料は何もないと言ってよい状態です。）豊後住の染矢を知ること、何かわかるのではと柳田常昭氏（昭和三年生、旭化成を五十二年退職、古文書部会長、能面彫りと古文書専攻で、ある意味では恵まれた人）と私の見込みで角川の大大分版を見てからの話で「そのうち私がコピーをとりますよ」と柳田氏宛約束済みなので、春になってバイクで動けそうな季節も近づいたので、そろそろ始動、そう考えて御無理をお願いした次第です。

五十六年度の会費と、益田先生の『郷土佐伯の碑文』を註文しました。

延岡でも昭和二十五年——二十七年にかけて、松田仙峽さん

という人が、碑文を写し取りガリ刷で残っていますが、見落し（落ちこぼれ）もだいぶあるようですし、その後始末をかねてやってみようと考えています。隔日に非番（二十四時間二交代）があるので、足の運動・体力錬成そして仕事の勉強（火消しは地利に詳しくないといけない）を兼ねて、市内をいつも歩き回っています。これも三十四年来の懸案ですが、当地でいう「うどん屋のかま」って言う（湯）ばかり」ですが良い刺激になりそうです。

二月二十六日

追信（一部）

染矢家文書五日落手致しました。御無理なお願いをしたのに、早速の御配慮恐縮しています。一か月程預からしていただきありがとうございます。一応全部コピーさしてもらいます。

三須文書（今読んでいる三須庄屋日誌は天保十三年分三十九頁、一部残っていたと思いますので、染矢家文書をお返しする時届けます）の中に田畑の売渡記録簿がたくさん目につきました。染矢家文書の目録にも「永代売渡田地証文之事」の類が多いですが、江戸時代の百姓の土地所有権とはどんなものだったのだろうという疑問が一層深くなりました。

五十五年九月始めて実物の古文書を見た時、印形の多いのにびっくりしましたが、染矢家文書にもあるようですね。明治維新後入ったというフランス型の民法の施行が、文化文政の頃から土地売買をどう変えて行った等考えるのに面白そうです。

（以下略）